

段畑コミュニティ形成に関わる物語描写研究

愛媛大学 学生会員 滝川敏広 愛媛大学大学院 正会員 羽鳥剛史

1. はじめに

近年、地域活性化やコミュニティ再生の観点から、地域住民自身による「まちづくり」の重要性が指摘されている。そのため、「まちづくり」が如何にして進められたのかという一般的知見を得ることは、今後の「まちづくり」に資するものとなることが考えられる。

さてここで、そうした示唆を得る方法として自然科学的なアプローチがある。しかし、「まちづくり」は、地域住民などの思いや熱意によって支えられた精神的な活動であるため、自然科学的なアプローチだけでは限界がある。

そこで本研究では、解釈学的アプローチを用いる。解釈学的アプローチとは、人間の生や活力を理解・解釈するための方法論である。デールタイは「解釈者が話し手の心理状態に自己移入し、その経験を追体験・追構成することを通じて、話し手の意図と精神の有様を了解すること」としている。そして、解釈によって生成された人間の生の経験的表現が物語となる。

以上の議論の下、本研究では、愛媛県宇和島市遊子水荷浦の段畑を対象として、段畑コミュニティ形成に関わる物語を描出し、この取り組みに関わる実践活動を解釈することを目的とする。

2. 段畑まちづくりの概要

愛媛県宇和島市遊子には、約 400 年の歴史を持つ段畑がある。その段畑は、“耕して天に至る”と形容され、昔から相互補完的な半農半漁の生業を力強く営み続けた、逞しい水荷浦住民の生き様を感じることもできる、ここにしかない独特の漁村風景となっている。

1999 年から、地元有志による段畑の保全活動が行われ、2000 年に「段畑を守ろう会」が結成された。そして、「段畑を守ろう会」・行政・学識経験者が一体となり保全活動が進められ、2007 年には、国の「重要文化的景観」に選定されている。その後、「段畑を守ろう会」による、段畑で収穫されたじゃがいもから作った焼酎「段酌」の販売、地元特産品を販売する「だんだん屋」、地元の食材を使用した料理を堪能できる「だんだん茶屋」の営業などの「コミュニティビジネス」が行われ、地域活性化の一助となっている。

なお、本研究では、段畑保全に関わる物語を「段畑

保全物語」、ビジネスに関わる物語を「段畑コミュニティビジネス物語」とし、それぞれの取り組みに関わった方を対象にインタビューを行い、その実践を物語的に描写する。以下は、インタビュー対象者を示す。

表 1 インタビュー対象者一覧

対象者	実施日時	所属
松田鎮昭氏	2013 年 12 月 27 日	NPO 法人段畑を守ろう会理事
広瀬岳志氏	2014 年 1 月 23 日	宇和島市教育委員会文化課
松田行雄氏	2014 年 1 月 23 日	耕作者
段畑を守ろう会婦人会様	2014 年 2 月 6 日	段畑を守ろう会会員

3. 段畑保全物語

戦前より、水荷浦住民は段畑と宇和海での半農半漁の生業を営んでいた。段畑での作業は過酷な上、わずかな収入しか得ることができず、貧しい生活となっていた。しかし段畑は、生きる上で不可欠な資源であり、住民生活と切り離すことのできない密接な関係であった。

昭和 40 年代になると、養殖業の繁栄により、豊かな生活を送れるようになった。しかしその反面、これまで自分たちを支えてきた段畑が徐々に荒廃し、30ha あった段畑は、平成に入ると 2ha 程にまで減少してしまう。

そして、地域住民は、「段畑を残すか否か」という決断に迫られたのである。そうした時、松田行雄氏は、『自由なる金ができた時に、まず先に先祖のお墓をしようと思った』

『やっぱり先祖が残した大変な遺産じゃきに、後世に残してやりたい』

という思いの下、自らが中心となり、段畑を残そうと段畑の保全活動に尽力したのである。

こうして松田行雄氏は、地域の歴史を裏切らず、歴史に筋を通したのである。

その後、2007 年には、西日本で初となる国の「重要文化的景観」に選定されたのである。その選定にあたっては、段畑を水荷浦住民の生業と切り離した「景観」として保存するのではなく、段畑での「生業」と「景観」を一体的に維持することが重視されたのである。

その際、広瀬氏は、

「段畑と生業を共にする“ヒト”へのサポートを行うため、景観構成の中に“ヒト”を入れたい」

との思いだったそうである。

実際、農林課によって、段畑の開墾や維持管理などに掛かる費用や人件費のサポートが行われている。また、文化課として、重要文化的景観選定に関わる規制づくりや保存管理計画策定などが行われている。

この様に、文化課と農林課の連携なくして、「段畑」は「重要文化的景観」になり得なかったのである。

4. 段畑コミュニティビジネス物語

(1) 「ポジビリズム」に基づく地域開発理論

ハーシュマンの「ポジビリズム」に基づく地域開発理論は、人間が未規定な未来に向かってその可能性を切り開いていくという人間社会観である。以下に、発展の原動力となる諸要因を示す。

① 「不確実性」

地域開発は様々な「不確実性」を克服するプロセス。

② 「特性受容・形成」

地域開発計画において、地域固有の性質(特性受容)と地域開発のため変容させていく性質(特性形成)がある。

③ 「後方連関・前方連関効果」

地域開発は、地域における様々な主体・資源が相互に関連する中で進展する。

本研究では、以上のハーシュマンの「ポジビリズム」に基づく地域開発理論を用いて、「段畑コミュニティビジネス物語」を解釈する。

(2) 段畑コミュニティビジネス物語

「段畑コミュニティビジネス」の始まりは、「段酌」の誕生にあった。松田鎮昭氏によれば、2007年1月頃、「段畑を守ろう会」の集まりの中で、自然発生的に「段酌」を作ろうという話が出たという。そして松田鎮昭氏は、「段酌」製造を決意したのである。

その後、1～5月にかけて、松田鎮昭氏を中心として、酒蔵への「段酌」の製造依頼や農協から運転資金の借入、生産者からじゃがいもの買い取りを行うなど、地域における様々な主体・資源が相互に関連する中で「段酌」製造の体制が構築される。

そして12月には、3800本の「段酌」の販売が開始され、翌年の7月には見事完売したという。こうして、「じゃがいも」と「重要文化的景観」という二つの特性が受容された一方で、「段酌」の販売というビジネス的側面が形成されたのである。そうした結果、「だんだん屋」で働く方たちへ支払われる賃金も時給300円か

ら700円へ向上している。

こうした背景には、松田鎮昭氏が培ってきた経営哲学があったのである。同氏の経営哲学を以下に示す。

① 新商品に社会性があるか

② 損益分岐点の把握

③ 損益分岐点を迎えるまで事業本体を支えることができるか

④ 事業撤退時のコスト削減

このように松田鎮昭氏は、「段酌」販売に伴う「不確実性」へ対処したのである。

そして、地域の気運も高まり、「だんだん茶屋」の経営も開始される。以前までは、お客さんと接することに戸惑いもあったという。しかし、松田鎮昭氏は、

『お客さんに対して親切に対応できるようになった』と語り、段畑を守ろう会婦人会様も、

『仕事にやりがいを感じ、お客さんと話をするのがとても楽しい』

と語っており、やりがいや地域内でのコミュニティも形成されている。

5. 結論

以上、「段畑保全物語」において、歴史に筋を通すことの重要性、景観文化行政と農水行政の連携の不可欠性、「段畑コミュニティビジネス物語」においては、地域における特性の受容・形成、地域開発に伴う不確実性への対処の重要性が示唆された。これらの諸要因は、ともすれば当たり前のように感じられるようなものである。しかし、こうした当たり前と思われることの中に、まちづくりの源泉とも言えるものがあり、こうした積み重ねが今後のまちづくりに資するものとなることが期待される。

謝辞：インタビューをお引き受け頂きました松田鎮昭氏、広瀬岳志氏、松田行雄氏、段畑を守ろう会婦人会様の各氏より、これまでのご経験について大変熱心にご教示いただきました。

各氏のこれまでのご尽力に深甚なる敬意を表するとともに、多大な協力を頂いたことを付記し、ここに深謝の意を表します。

参考文献

- 1) ディルタイ(久野昭 訳)：解釈学の成立，以文社，1987
- 2) A・O・ハーシュマン(矢野修一 他，訳)：連帯経済の可能性，法政大学出版局，2008
- 3) アルバート・O・ハーシュマン(麻田四郎，所哲也 訳)：開発計画の診断，巖松堂出版，1973
- 4) ALBERT O. HIRSCHMAN(小島清 監修，麻田四郎 訳)：経済発展の戦略，巖松堂出版，1961